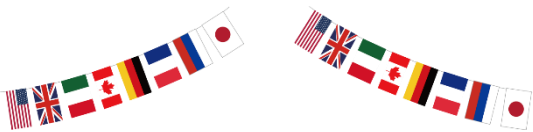


スポーツおじいさんにな りたい！⑨



『あしたのジョー』
(長谷部安春監督・1970)

國友万裕



1. 25年前のトラウマ

あれは、今からちょうど25年前のことだった。当時、俺は大阪の大学で非常勤で教えていたので大阪にはしょっちゅう行っていた。その日は、「男性グループ」のミニコミが出る頃だと思い、授業が終わった後で、ドンセンターに向かったのだった。当時、ドンセンターの一階にしようか堂とかいうミニコミがたくさん売られている小さなお店があったのだ。

ミニコミは予想通り置かれていた。ところが、である。ミニコミには表紙にタイトルとライターの名前が書かれた目次が出ているのだが、手に取ってみると俺の原稿が巻頭に載せられているのに、タイトルと名前のところが一本線で消されているのである。中をみてみると中身はチラシで差し替えられている。

一瞬、ギョツとして、店の人に、「私は、実はこの消されているライターのものなのですが、これはどういうことなんですか?」と訊いてしまった。店の人が知っているわけもないのだけど、あまりのことに気が動転してしまっていたのだった。

何か起きたのだと思った。おそらくAさんの仕業だろうとは思ったが、詳しいことはわからない。俺はミニコミを一冊買って、京都に戻ると、早速、男性グループに絡んでいる何人かの人に同送でメールした。「ミニコミはどういうことだったのでしょか?」と。

その後、その原稿を依頼したBさんから電話がきた。

「ドン、行きました」というと、「あ、もう行ったの?」とBさん。

「Aさんがちょっと変なんだよ。これからちゃんと処理するからあまり動かないで欲しいんだ。今國友さんが騒ぐとまた國友さんが悪者という言い方をされるから」

「実はもう数人の人にメールしちゃったんです。」

「じゃあ、國友さんがメールした人のリストを私のアドレスに送ってくれ。ちゃんと釈明するから」

「どういうことなんですか。私の原稿が一番、最初じゃないですか」

「だから、原稿はすごく良かったんだよ。特集のテーマにピッタリという感じだねと編集部のみんなで言っていたんだ」

どうやらAさんが他の人たちには内緒で原稿を差し替えたみたいだった。その夜、Bさんは、「お詫びと説明」という件名で、俺がメールした人たちにメールを送り、俺にも同送してくれた。

そのメールは、「國友さんの原稿はとても内容の濃いもので、内容的には全く問題はありません。私たち編集部はミニコミを印刷し、そのあと発送係のAさんにバトンタッチとなりました。ところが数日後にAさんが國友さんの原稿を差し替えて発送したことがわかりました。依頼された原稿が載せられていないだけならまだしも、表紙にタイトルとライターの名前が書かれており、そこが一本線で消されていました。これでは國友さんではなくても、誰でも不快になると思います。國友さんのメールが届いたのはこういう経緯があつてのこと。國友さんに対して不審不快の思いを抱かないでいただけますよう、ご配慮願えれば幸いです。Aさんにこの件について問い合わせたところ、『運営委員会の了承を得ている』とのこ

とでした。したがって、この件に関しては、運営委員にお問い合わせください。編集部では対応できません」という内容のものであった。

その後、この男性グループの緊急運営委員会が開かれることになった。これは当事者のAさんではなく、Bさんでもなく、運営委員の一人、八百屋のおじさんのCさんが提案したものだったと聞いている。それで他の運営委員の人も集まって、話し合いは行われ、その結果はBさんがメールで伝えて来た。

「当然のことだけど、今回の件に関しては、國友さんを批判する人は一人もいなかった。むしろAさんのほうが惨めな雰囲気だった。どうみても、彼の方が問題なわけだから」と。

Aさんからしてみれば想定外だったのだと予想している。おそらくAさんはあの原稿は、Bさんが俺に依頼した原稿だったことを知らなかったのである。当時、俺はBさんと1年ぐらい気まずい雰囲気になっていて、それまで1年間ぐらいは全然、やりとりしていなかったのである。ところが、Aさんから男性グループからの破門を言い渡されて、自分の心を消化できなくて、どうすることもできなくてBさんにメールしたところ、Bさんは共感してくれたのだった。Bさん自身もその当時そのグループとシカトになっていたため、Aさんだけが決定権を握るというやり方に疑問をもっていたのである。それで、Bさんはたまたまミニコミ用の原稿が集まっていないからということで、俺に原稿を依頼してきたのだった。

ところが、Aさんは俺が勝手に投稿した原稿だと思い、徹夜もので差し替えて、後は野となれ山となれ。何か他の人に言われた

ときは、適当に俺を悪者にしておけば、どうにか煙に巻くことができると思っていたのだろう。しかし、あれはBさんが頼んだものだった。おそらく、そのことを知ったAさんは真っ青だったはずだ。

Bさんの話だと、Aさんは、Bさんや他の編集部の人たちがミニコミを印刷している最中に近くにて手伝っていらしたのだそう。本当に運営委員会の承諾を得ているのだったら、その時点でストップをかけて、原稿を出さないということもできたはずだ。

ところが、Aさんは運営委員会の承諾なんて得ていない。おそらく、Aさんは、俺と決裂したあと、他のメンバー全員に「國友さんとメンズリブの関係はないものとする。國友さんからメールが来ても、メールに反応しないでくれ」というメールは送っているのである。

とは言っても、他の人たちは気にかけてもいなかったのだろう。所詮は他人事なわけだし、みんな忙しい。深く考えずに、適当にスルーしていたのだ。

適当にこちらがスルーしていると、それをアリバイにしてしまう。それがAさんのいつものやり方だった。俺はAさんと2年間べったり付き合ったので、それがAさん節の真骨頂であることはわかっていた。「あの時、私は『國友さんを破門にする』とメールした。みんなそれに反対しなかった。だからみんな了承してくれているんだと思っていた」と言い訳しようと思っていたのだろう。

Aさんは自分でも認めていたが、せっかち人間である。しかも、自己表現下手で、自分の思いをストレートに伝えることができ

ない。だからいつだって、先に結論を出してしまい、後になってどうすることもできなくなってから帳尻を合わせようとするのである。そのことで俺は何度もAさんと喧嘩していた。

俺はその当時、ある心療内科で女性のカウンセラーの先生のカウンセリングを受けていて、その先生からは、「訴えたらどうですか。いくら小さなミニコミであっても、こんな差し替えのされ方をしたら、國友さんの方が原稿を期限通りに出さなかったからだと思われませんか。名誉毀損ですよ」と言われたものだった。

あの当時、心の相談センターで無料の法律相談をしていたので、弁護士先生に相談にも行った。するとその先生からは、「原稿を載せなかったことは、その男性グループの勝手だから訴えることはできないけれど、名前の上を傍線で消したことは、名誉毀損にあたるから訴えられる」と言われたものだった。

一方、Aさんは、運営委員会では弁解できなくて惨めだったとは聞いているが、そのことで処分されたわけではなかった。他の運営委員の人たちからは、謝罪のメールすら来なかった。他の人たちは、ことの重大さがわかっていないのだ。裁判を起こされても仕方がないようなことをしといて、我関せずという気持ちでいるのである。

これでは緊急運営委員会の意味がないのである。

原稿に関しては、むしろ印刷し直す、もしくは次の号で説明を入れて刷り直して欲しいところだったのだが、それはBさんが断ったとのことだった。「何も知らない読者の人に國友さんとAさんとの確執を伝えたく

ない」という考えだったらしい。

それでは困る、なんとかもう一度印刷しなおせと言いたいところだったのだが、あの当時の俺は B さんぐらいしか繋がっている人がいなかったため、B さんからまで嫌われることになったら四面楚歌になってしまう。しかもあの当時はお金や仕事がなく、苦労していた時期で、裁判を起こすようなゆとりもなかった。

結局、この差し替え事件は闇に葬られてしまったのだった。

2. ラストワード(決定的な言葉)

その差し替え事件から早いもので 25 年。

そのミニコミの復刻本が出ることになって、そのことをたまたま参加した学会で聞いたので、原稿を元に戻してくれないかということ俺は訴えていた。

あの時、B さんが差し替えられなかった分のミニコミを数冊持っていたので、俺に送ってくれていたのだった。「捨てなくて良かった」と思ったものだった。まさか 25 年もたってからあの幻の原稿が目の目を見るとは思ってもいなかったけれど、世の中何が起きるかわかったものじゃない。

A さんは 5 年ほど前から認知症なのだそう、もう活動も SNS もなさっていない。今回の復刻本が出たのも知らないはずである。もう他のメンバーともやり取りは全くないと聞いている。俺の原稿が戻るとなったら、A さんはきっと悔しがるだろうけど、認知症でわからなくなっているから、そういう気持ちも湧いてこないのかもしれないのだった。

断っておくが、A さんとの確執に対して、

俺にまったく非がなかったとは言っていない。俺の方も A さんには相当酷いことを言っている。だけど、A さんと決裂するまでには積もり積もったことがたくさんあったのだ。

何よりも大きかったのは、大阪府に届けるお金の領収書のことだった。俺は 2 年間べったり、プロジェクトに関わった。そのプロジェクトは、その男性グループの初めての、そしておそらく最初で最後のビッグプロジェクトで、俺が会計係を務め助成金をおろしたのだった。

ところが、プロジェクトはうまく進まない。30 人から 40 人くらいの応募者が公募で集まったのだが、みんな途中で怒って抜けていく。今思えばあのプロジェクト自体が、零細な社会運動団体でやっていくには無茶なプロジェクトだったのである。他のメンバーが抜けるごとに、その分の負担は全部俺にきていた。もうへとへとになっていた。

そして、2000 年の夏、やっと大阪府に届けるための冊子はできあがったものの、その後交通費や資料代を証明するための領収書が何枚も必要になったのである。別にお金をただ取りしようとしていたわけではない。その当時かかった交通費や経費は、すべて参加者の人たちに送っていた。しかし、他の参加者たちはみんな怒って抜けて行っているため、領収書を頼んだところで、応えてはくれないことはわかっていた。

それで筆跡の違った領収書をたくさん用意しなくてはならなくなったのである。お役所仕事は大変だと思ったものだった。俺が一応は会計係だったのだが、偽の領収書なんて書いてくれる人なんて周りにはいな

い。

あの当時はその男性グループの人たちで、グループの事務所に出入りしている人がたくさんいた頃だった。俺はその人たちが集まった時に頼んでくれないかと A さんに頼んだ。それが一番手っ取り早いのである。その時に事情を話して書いて貰えば、いっぺんに何枚もの領収書は集まるのだから。

ところが、A さんはなんとかして俺につくらせようとなさるのである。

「ああいうものは、プロジェクトの中で処理するものなんだ。B さんや C さんたちはグループの一員ではあるけど、あのプロジェクトには関わっていない。だからあの人たちには頼めないんだ」というのが A さんの言い分だった。

「じゃあ、誰に頼めばいいんですか」

「学生に書かせたら、ええやーん」

これが、俺が完全に A さんにキレるラストワードとなってしまったのだった。

俺はあの頃仕事がなくて困っている頃だった。例えば、中村正さんや伊藤公雄さんのような大学のなかで高い地位にある先生でも、自分の教え子に偽の領収書をしかも自分ではない人の名前で書かせるなんてことはできないはずだ。

まして、俺はしががない非常勤講師。権力もないし、そんなことがバレたら、雇い止めになるだろう。俺が雇い止めになった時に、その後の責任を A さんがとってくれるというのだろうか。俺はあれで完全にキレて、それから A さんとの確執は本格化して行ったのだった。

結局、この人は自分の保身しか考えていない。他のメンバーの人に手を汚すようなことは頼めないから俺にやらせようとする。

しかも彼の言っていることは理屈が通っていない。プロジェクトの中で処理しなきゃいけないから、他のメンバーの人には頼めないと言っておきながら、俺の教え子に偽の領収書を書かせろと。俺の教え子たちなんて、他のメンバーの人以上にプロジェクトとは無関係の人たちであり、なぜ、そういう人に偽の領収書を書かせることができるというのだろうか。

A さんと俺とがうまくいかなくなって行った原因の一つは、A さんは俺が頼んでも原稿や講演など表舞台の仕事はまかせてくれないことだった。A さんによれば、「私たちは長く歩んできたともいえる同士愛で結ばれているんだ。あなたはまだ入ったばかりだから講演などは回せない」みたいだった。

そんな熱いもので結ばれているんだったら、なぜ、その人たちには偽の領収書を頼めないの？俺が自分の教え子に頼まなきゃいけないの？

そこから壮絶な憎しみあいが始まって行った。

そして、プロジェクトが終わると、A さんはあっさりと俺に破門を言い渡してきた。もう俺の力がなくても、自分たちだけどうにかなる。俺がいなくなった方が、ワークショップの依頼などは自分たちのものにすることができる。あれだけの負担を俺に追わせておいて、用がなくなればポイ捨てである。

しかも、他の人たちの了承を得たわけでもなく、彼の一存。あの人はいつだってこのパターンなのである。もう邪魔になってきたから、あっさり俺を切り捨てて、そのあとになって言い訳を考える。それが A さん節

である。

おそらく、俺の勤では、他のプロジェクトのメンバーたちには相当俺のことを悪く言っているはずだ。徹底的に俺のことを悪く言って、他の人たちにはあいつが何を言ってきたても何も反応しないでくれと念を押したはずなのだった。

3. 楯

こんなことを今更書いても意味がないのだが、あえてここに書かせてもらったのは、この秋、復刻本の出版を祝するための懇親会を持とうかと思っているという連絡が入ったからである。

俺は、あのグループの人で SNS で繋がっている人はほとんどいない。俺の方も友達リクエストなんて送っていないし、他の人たちは俺に偏見をもっているので、繋がってもくれないだろう。

俺も相当酷いことは言っているけど、ただ一つだけわかっておいて欲しいことは、俺を破門にしたのは A さんの一存であり、差し替えたのも A さんの一存。それは揺るぐことのない事実なのである。他の人になんの了解も得ていないのに、「運営員会の了解を得ています」としらばくれるのはどう考えても問題なのだった。民主的な合意体制ができあがっていないのだ。

一方で、俺は俺の方の事情を他の人たちに話したことは一度もなかったのである。それ以来俺はあの団体に行かれなくなってしまったし、他の人たちはいくら A さんが悪いことをしたと言っても、A さんとの関係が壊れたわけでもない。

古い話で恐縮なのだが、前に郷ひろみが

離婚した時に『ダディ』という本を出して話題になったが、それに対して、二谷友里恵が『楯』という本を出した。彼女に対する誹謗中傷に対する楯の意味で、彼女は彼女の立場や心情を吐露したのだった。

俺が男性グループとの経緯をここに書いたのは、俺にとっての「楯」である。どういう噂が流れているのかはわからない。しかし、それは俺が流したものではないのだ。俺の方の立場をわかった上で、判断してもらわなかったら困るのだった。

もちろん、もうあの人たちとお付き合いすることはないだろう。もうみんなお爺さんになってしまっているし、俺の方も別に付き合いたいとは思わない。

そもそも、俺がああ男性グループに入ってしまったのが間違いなのである。

ある先生がおっしゃるには、あのグループのメンバーの人たちは、自分が男であることが辛いからというよりも、社会を変えるために男性問題を問うというタイプだったとのことだった。関西メンバーは学生運動世代の人が多いため、社会を変えたい、社会を牛耳っているのは男だ、だから「男」を批判的に研究することで、社会を変えることができる。だから、この運動を始めたのだろう。

だけど、俺はそうじゃない。俺は、「男らしさ」の問題で深く傷つき、その傷をどうにか癒したくて、グループに足を踏み入れたのだ。元々、期待していたものが違っていたのだった。

最近、西井開さんの『転落男性論』という本が出た。俺はまだこの本を読んでいないのだが、俺だったら「転落男性論」ではなくて、「最下位男性論」を出すだろうなあと思

う。「転落男性」の場合は、男の規範から転落したくないと「男」の規範にしがみついている男性たちのことなのだろう。だけど、俺は最初から「最下位男子」で転落する余地はなかったのである。

4. 京都を学ぶ

今年の春休み、メキシコ人の家族をガイドすることになった。1年ぶりくらいのボランティアガイドである。

実は1年間はややトラウマだったのだ。過去2回のガイドがあまり上手くいかなくて、途中で、「ここまで結構です」になってしまった。お金はボランティアだから少額ではあるんだけど、払ってくれたし、別に俺のガイドが気に入らないからではなく、向こうは気ままに考えていて、お金払うんだから途中で終わりにしても構わないと思っただけだ。

そういうケースは時々あるみたいだが、2件続けて、そういうのが起きると、なんとなく自信をなくしてしまう。

今回はメキシコ人家族。メキシコの人とこれまで知り合ったことはないのだ。詳しい人に聞いてみると、メキシコ人は親日的でおおらかだとのことだったので、大丈夫だろうとは思いつつもやはり不安だった。

しかも、今回はルートが無茶だったのである。最初に伏見稲荷に行って、それから嵐山に行き、竹林、モンキーパーク、保津川下りなどをした後、トロッコ列車に乗って、夜は二条城のライトアップを見るというタイトスケジュール。向こうは京都の地理がよくわからないので、目一杯詰め込んでしまっているのである。

子供が二人のご夫婦なのだが、娘さんが誕生日なのだそうで、リラックマの湯で誕生日を祝いたいとのことだった。

あまりにも不安なので、ガイドの2週間ほど前に俺は下見に出かけた。何よりもリラックマの湯に行っておかなければと思っていた。リラックマの湯のカフェは非常に混んでいて、早くに整理券をとらなければ、食事ができないと聞いていたからである。

下見しておいて正解だった。リラックマの湯のカフェは10時から整理券が配布になるので、10時過ぎまでには行かないと食事ができなくなることがわかったのだ。保津川下りは高いので結局バスすることになり、でもトロッコ列車はすでにチケットを買っていらしたため、その時間までには嵐山観光を切り上げなきゃいけない。

当日は、まず、8時ごろに伏見稲荷で待ち合わせ、しばらく伏見稲荷を見物した後、9時過ぎから大急ぎで嵐山へと向かった。10時過ぎにはリラックマの湯について、無事に整理券を受け取った。と言っても、整理券番号は35番くらい。それまでの時間は竹林に行ったり、渡月橋を回ったりして過ごし、13時30分頃についにリラックマの湯の食事へとありついたのである。

モンキーパークは無理だろうと思い、そのことをご家族に伝えた。彼らはおおらかで別にモンキーパークにこだわっていたわけでもなかったのだ。近くのお寺やお店などを回って、そして、トロッコ列車だった。

このトロッコ列車が1番の感動もので、京都の風景をたっぷり堪能できたし、ガイドをしてよかったと思ったものだった。しかし、気になっていたのは時間。トロッコ列車がついた後、二条駅まで出たのが18時15

分くらい。ご家族は二条城のライトアップに18時30分に予約なさっていたのである。俺は、二条駅にでるとタクシーを拾ってあげて、そこでご家族とお別れした。

無事に二条城に時間通りについたという連絡が入った。あー、長い1日だった。しかし、とてもいいご家族で、ガイドの終わりに子供たちが僕にメキシコからのプレゼントをくれた。幸せな1日だった。

やはり俺は社会運動よりも、こういうことをしている方が向いているのだ。

5. 『あしたのジョー』(長谷部安春監督・1970)

Elle というネットの雑誌に、「いつからハリウッド俳優はマッチョになったのか」(<https://www.elle.com/jp/culture/celebgoSSIP/g30760764/hollywood-actors-have-become-macho-since-when-200206/>) という記事が出ている。

昔はターザン役の俳優であっても今ほどマッチョではなかった。それが今はマッチョだらけになってしまっているという記事である。

確かに言われてみるとその通りで、この『あしたのジョー』の主演の石橋正次に関しても、ボクサー役でありながら、それほど綺麗な身体ではない。もちろん、ボクシングは減量があるのでマッチョマンでは戦うのが不利である。『ロッキー』のようなムキムキのボクサーはあくまでも映画用であることは前から聞いていた。

しかし、それにしても石橋正次の体は、最近の俳優さんの体に比べると美しくない。普通よりもちょっと締まっているという程度の体であり、彼が上裸になる場面はたく

さん出てくるが、それをマルヴィの言う「見られる客体」として意識して撮っているわけではないのである。

ただ、ボクシングの場面以外でも、彼が上半身裸になる場面は非常に多くて、裸になるのは男性性の発散なんだなあとは改めて思ったのだった。

しかも、この主人公は少年院上がりの貧しい青年という設定になっている。しかも、ドヤ街で、いちばんの不良という設定だ。やはり、男は貧しくて、ワルで、そして裸になるというステレオタイプが、この時代は根強かったのである。

俺は子供の頃、ワルになれない、気の小さい子だった。だから女の子からも馬鹿にされた。俺は比較的経済的には恵まれて育て、元祖ワンルームマンションのドラ息子だった。だから大学の頃、いつだって後ろめたい気持ちを抱いていた。女の子だったらマンションで暮らしている子もたくさんいたのだけど、男でマンション暮らしは、当時は少なかったのである。それに俺は裸が似合うような男じゃなかった。男が裸になる時は「戦う」時である。裸は自己主張であり、まさにこの映画を見ているとそれを感じる。

しかし、これは今から56年も前の映画である。

今となっては草食系男子が主流となり、この映画の主人公みたいに喧嘩したり、大声で怒鳴ったりする奴なんて見かけない。また、マンション暮らしも俺たちの頃は少なかったけれど、それから5年も経つとそれが普通になっていった。それに男の裸も、昔みたいに戦いの証ではなく、今となっては男だって美しく見せるための人工的なものになってきている。

もっと遅れて生まれてきたかったなあとつくづく思う。でも、人生は取り返せない。今、62歳。残された時間をどうにか充実させて生きるしかないのだ。しかし、人間の人生なんて、どれだけ頑張っても自分の理想通りに行くものじゃないのだ。

偉人と言われている人たちも、偶然に偶然が重なって偉くなっていくのであり、最初から偉くなろうと思って、計画通りに偉人へと進んでいくわけではない。それはその人が持って生まれた宿命なのである。

さあ、これから俺の人生はどうなるのか。神様に導かれて生きるしかないのだ。辛かろうが幸せだろうが、長かろうが短かろうが、それも全て人生。その人の宿命である。

人生は切ないなあ。つくづく、それを感じる年齢になってきている。